

使徒言行録 第9章32～43節

今日はペンテコステ礼拝ですので、最初に少しペンテコステについてお話をしたいと思っています。ペンテコステというのはギリシア語で「50番目」を意味する言葉で、イエス様が復活されたイースターから数えて50日目、イスラエルのカレンダーでは当日を第一日目と数えますので、私たちのカレンダーで言いますと49日目、すなわち、イースターから数えて7週間後の日曜日に天から聖霊が降ったことをお祝いする日で、聖霊降臨祭とも呼ばれ、教会の誕生日とも言われています。このペンテコステの日に起こった出来事は使徒言行録の2章に記されていますが、この箇所は昨年10月5日に説教しましたので、そちらをご覧ください。教会のホームページにも掲載しています。

このペンテコステ、ユダヤ教でももともと大切なお祭りの日で、ユダヤ教三大祭の一つに当たります。ユダヤ教三大祭とは、過越祭、これはイスラエルの民がエジプトの奴隷から解放される際に神様が行った最後の災いをイスラエルの家だけ過ぎ越していったことによって、イスラエルの人々がエジプトの奴隷から解放されたことを記念して行われる祭りですが、イエス様が十字架にかけられる前の最後の晩餐はこの過ぎ越しの祭りを祝う食事でした。キリスト教では、過ぎ越しの祭りはイエス様がよみがえられたイースターとして祝われています。次に、七週祭とも呼ばれる刈り入れの祭りが 있습니다。これは、過ぎ越しの祭りから7週間後に小麦の刈り入れを祝う祭りで、モーセがシナイ山で神様から十戒をいただいたことの記念としてもお祝いされます。キリスト教では五旬祭、旬は10日を表しますので、50日後のペンテコステに当たります。もう一つは仮庵祭という、秋の収穫祭があります。これは、エジプトの奴隷から解放されたイスラエルの人々が荒れ野で仮の庵である天幕に住んだことを記念しています。この仮庵祭は10月初旬ごろに行われますが、キリスト教ではこれに当たるものはありません。代わりにキリスト教では、クリスマスが祝われるようになりました。余談ですが、初代教会でお祝いされていたのは、イースターとペンテコステだけで、クリスマスは数百年も経ってからお祝いされるようになりました。クリスマスの日付も、聖書にはイエス様がお生まれになった日は記されていないので、北ヨーロッパ、北欧の冬至に当たる太陽神のお祭りの日がクリスマスの日として制定されていきました。ちなみに、クリスマスの際に飾られるツリーやリースも、イスラエルには針葉樹はありませんから、これらも北欧の習慣がクリスマスとして祝われるようになっていきました。

さて、ペンテコステの話はそのくらいにしておいて、今日の聖書の箇所に戻りますと、私たちが読んでいます使徒言行録では、これまでパウロの回心の話が出てきていました。イエス・キリストを偽物と思い込み、キリストを信じる者たちを捕まえては牢に入れていたパウロがダマスコの途上で復活のイエス・キリストと出会い、その人生が劇的に変わっていったその様子を聖書から聴いてきました。パウロは回心したとたんにキリストの宣教者としての働きを行う者となりました。すなわち、パウロの回心は、宣教者となるためだったと言っても過言ではありません。そのパウロの話に続いて、使徒言行録ではペトロの伝道の話へと移っていきます。ペトロもまた、宣教者としての働きをなしていくのです。

今日の聖書の箇所には、2人の女性の話が出てきます。一人はアイネアという女性です。32節には、ペトロがリダに住む聖なる者たちのところへ下って行ったと記されています。

から、アイネアはキリストを信じる者でした。ところが彼女は、中風で8年も寝たきりでした。彼女のまわりには、彼女をお世話していた教会の仲間たちがいたのでしょう。けれども、8年はとても長い月日でした。みなさん、自分の家族が8年も寝たきりでいることを想像してみてください。しかも、アイネアは家族にではなく、教会の兄弟姉妹によってお世話を受けていたのです。そのアイネアが、イエス様の十二弟子の一人であるペトロによっていやされます。ペトロは、イエス様から直接教えを聴いていた十二使徒だったので、このような力ある業を行うことができたのでしょうか。いいえ、今日の聖書の箇所では、アイネアがいやされたのはペトロの力によるのではないと記しています。34節でペトロはこう告げます。「アイネア、イエス・キリストがいやしてくださる。起きなさい。自分で床を整えなさい」。ペトロは自分の力で病をいやせるとは考えていませんでした。イエス・キリストがいやしてくださる。使徒言行録3章に美しの門で起こった出来事が記されています。生まれながら足の不自由な男がペトロとヨハネに施しを乞うた際に、ペトロは彼に向かってこう言います。「わたしには金や銀はないが、持っているものをあげよう。ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい」。このときもペトロは、「イエス・キリストの名によって」命じます。いやしの力はペトロにあるのではなく、イエス・キリストにあるのだ。ペトロのその信仰によって、イエス・キリストの力でアイネアはいやされていきます。すると、そこに住んでいた人々は、アイネアに起こった出来事を見て主に立ち返ったと聖書は記しています。イエス・キリストによるいやしの出来事と、それによって引き起こされる人々の立ち帰り。ペトロはその仲介役にすぎませんでした。

もう一人の女性はタビタ、ギリシア語に訳すとドルカス、かもしかという意味の女性で、彼女はたくさんの善い行いや施しをしていましたが、病になって死んでしまいます。39節の後半には、「やもめたちは皆そばに寄って来て、泣きながら、ドルカスが一緒にいたときに作ってくれた数々の下着や上着を見せた」と記されています。たくさんのやもめたちのお世話をし、みんなから慕われていたドルカスの様子をうかがい知ることができます。あんなに善い行いをしていた人が、なぜ病気で死んでしまったのか。私たちの周りにも、そんな出来事がたくさん起こります。37節の後半には、ドルカスが亡くなった後、清められて階上の部屋に安置されたことが記されています。階上の部屋は、風通しがよかったというだけではなく、神に近いところ、神の啓示の場所とも考えられていました。そんなふうにはドルカスを慕って、彼女が召されたことにとっても傷んでいた教会の人たちでしたが、彼女らは、ペトロが近くに来ていることを知り、呼びに行きます。イエス様の十二弟子の一人であるペトロなら、何とかしてくださるかもしれない。こうして呼ばれたペトロがやってくると、皆を外に出して、ひざまずいて祈ります。祈りの中で、ペトロはイエス・キリストの名によってドルカスが起き上がることを願ったのでしょう。ペトロがドルカスに向かってかけた言葉には、イエス・キリストの名によってという言葉は出てきませんが、この出来事はルカによる福音書の8章に出てくる会堂長の娘を生き返らせたときの出来事によく似ています。亡くなった娘の前でイエス様は、「娘よ、起きなさい」と呼びかけると、彼女は起き上がります。ペトロはその場に一緒にいましたので、その時のことを思い出しながら、イエス様がなされたように行っただけなのでしょう。ひざまずいて祈りながら、主イエス・キリストがなされたように行うことによって、ペトロを用いてイエス様がその場で働いてくださった。ドルカスは、イエス様の力によって生き返ります。

さて、今日の聖書の箇所を読みながら、しかし私たちの現実の問題として、イエス・キリストの名によっていやしを願っても、なかなか叶えられないことを知っています。なぜでしょうか。それは、私たちの信仰が足りないからなのでしょう。それとも、イエス・キリストが私たちの上に働いてくださらないからなのでしょう。その答えは、どちらもノーです。私たちが祈る現実の中で、なかなか奇跡的ないやしの出来事が起こらないことの理由は、大きく2つのことが考えられます。一つは、もし私たちの祈りが毎回必ず聞かれて、いやしや奇跡がその都度行われたとするなら、私たちは自分の祈りに力があると勘違いをしてしまいます。祈れば叶えられる。それが続けば、私の祈りに力があるのであり、その背後におられるイエス・キリストのことが忘れ去られてしまう危険性があるのです。私たち人間には限界があります。そして私たちの祈る祈りにも限界があります。大事なことは、その祈りを聴いてくださるお方がおられるということ。その祈りが叶えられるかどうかは神様の側の問題であり、祈る側の祈りの力の問題ではないのです。そしてもう一つは、いやしや奇跡的なことが起こり続けるとき、人々はそのいやしや奇跡にばかり目が行くようになり、キリストによる救いとはいやされることや奇跡が起こることであると勘違いしてしまう恐れがあるということです。イエス様がこの世に来られ、十字架の贖いとなられたのは、この世にたくさんのいやしや奇跡を起こすためではありませんでした。ヨハネによる福音書2章にカナの婚礼の席で、イエス様がかめに注がれた水をぶどう酒に変えた奇跡の話が出てきます。そしてその後の23節以下には、こんなことが記されています。「イエスは過越祭の間エルサレムにおられたが、そのなさったしるしを見て、多くの人がイエスの名を信じた。しかし、イエス御自身は彼らを信用されなかった」。奇跡やしるしを見て信仰に入った人たちを、イエス様御自身は信用されませんでした。奇跡やしるしは信仰に入るきっかけとなることはできても、イエス様がこの世に来られた本当の意味にたどり着かなければ、それらは意味のないことになります。では今日の聖書の箇所から、私たちはいったい何を学べばよいのでしょうか。

ここに出てくる二つの出来事は、私たちの教会、これは神戸西教会だけではなく、全国の諸教会が抱えている問題が表されているように思います。8年間も寝たきりの女性をお世話している教会の姿。また、たくさんのやもめたちをお世話していた女性が病のために召されていく出来事。私たちもこのような現実に出会います。そして、そのような出来事が起こってくる日々の現実の中で、教会の兄弟姉妹は8年間も寝たきりのアイネアを見守り続け、たくさんの善い行いや施しを行っていたドルカスが病に倒れたとき、ていねいに葬ってあげました。そのような教会の日々の出来事の中で、たまたまそこを訪れたペトロがイエス・キリストの名による奇跡の出来事を起こし、2人の女性がいやされた。そしてそのことは、それぞれの教会で関わり続けた人たちにどれほど大きななぐさめと平安を与えたことでしょうか。8年間寝たきりのアイネアをお世話した教会の兄弟姉妹、やもめたちのお世話をし続け、病に倒れたドルカスを、ていねいに送ってあげた教会の兄弟姉妹。そして、そこをたまたま訪れて、主イエス・キリストのいやしの業を行った使徒ペトロ。このペトロはかつて、イエス様を3度も知らないで裏切ってしまった張本人です。そのペトロがイエス様を裏切る前に、イエス様はペトロの裏切りを予告しています。ルカによる福音書22章31節、「シモン、シモン、サタンはあなたがたを、小麦のようにふるいにかけることを神に願って聞き入れられた。しかし、わたしはあなたのために、信仰が無くな

らないように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい」。こうして、イエス様から信仰が無くならないように祈られたペトロは、立ち直った後にイエス・キリストの御業を行う大伝道者となっていくのです。

今日の聖書の箇所には、それぞれ神様の善い業を行った人々の姿が記されています。8年間も寝たきりのアイネアをお世話し続けた教会。たくさんのやもめたちのお世話をし、みんなから慕われていたドルカス。そのドルカスが病に倒れたとき、彼女をていねいに葬ってあげた教会。そして、その二人の女性をイエス・キリストの名によっていやしたペトロ。教会は、お互いに善い業を行うように立てられているのです。エフェソの信徒への手紙2章10節に、こんな御言葉があります。昔の口語訳聖書の言葉で読みます。「わたしたちは神の作品であって、良い行いをするように、キリスト・イエスにあって造られたのである」。イエス・キリストにあって生まれ変わった人々は、善い行いをするように造られているのです。このことを実践し続けた初代教会には、たくさんの人たちが集まっていきました。善い行いを続けることが、伝道の力となって行ったのです。

私たちの教会も、8年間も寝たきりで会ったアイネアを支えた教会のように、またたくさんのやもめたちに善い行いと施しをしていたドルカスのように、そのドルカスをていねいに葬って送り出した教会のように、そしてそこに働きかけたペトロのように、この神戸西教会において善い行いを続けていきたいと願います。

お祈りしましょう。